

【最優秀賞】

ハーフだからなんだ

行橋市立泉中学校 2年 福島 ソフィア

私はフィリピンと日本のハーフで、幼いころにフィリピンに一年住んでいました。それ以降は母の都合で日本に住むことになりました。自分のルーツが他の人とは少し異なることから「人種差別」について考える機会が多くありました。この作文では、私が経験したことや感じたことを通じて、人種差別について考えてみようと思います。

小学生の頃、友達から「ハーフだから英語話せるよね」と何度も言われたことがあります。私にとっては少し困った質問でした。私は日本で育ったので英語は得意ではありません。それなのに、ただ「ハーフ」という理由で英語を話せると思われることに、ちょっとした違和感を感じました。この経験を通して、人は見た目や出身だけでその人のことを判断してしまうことがあると気づきました。

また、同じハーフのA君と比べられることもあります。ある日、友達と下校している時友達から「どうしてA君は英語が得意なのにあなたは得意じゃないの？」と聞かれたことがあります。A君は、私よりフィリピンにいた期間が長いです。しかし、私は、一歳の頃にしかフィリピンにいなかつたので家庭では、ほとんど英語を話す機会はありません。それなのに、見た目やルーツだけで英語が話せるかどうかを判断されて、比べられてしまい、とても傷つきました。

私たちは皆それぞれ異なるバックグラウンドや環境で育っていますが、それを理解せず単純に「ハーフだから」という理由で期待や偏見を持たれることが、どれほど負担になるかを痛感しました。このような経験から、自分自身を他人と比較することの難しさと、個々の背景を尊重することの重要性を学びました。

私の母も日本での生活の中で似たような経験をしています。母は私よりも長い間日本に住んでいて、日本での生活にはすっかり慣れています。しかし、仕事を探すときに、母がフィリピン人であることを理由に採用を断られたことが何度かありました。母は日本語も流暢で、その職に十分な資格と経験を持っていましたにもかかわらず、「お客様が驚くかもしれないから」という理由で断られたことがあります。

このような経験は、私たちの社会がまだまだ多様性を受け入れきれっていない証拠かもしれません。母はこの出来事にとても傷ついていましたが、それでもめげずに新しい仕事を見つけるために努力を続けました。その結果やりがいを感じる職に出会いました。私にとって母の姿はとても励みになりますし、母の強さ

を誇りに思います。

人種差別をなくすために、私たちは何をすべきでしょうか。私はまず教育が重要だと考えます。学校や家庭で多様性について学ぶ機会を増やし、異なる文化や背景を持つ人々を尊重する心を育むことが必要です。例えば、学校の文化祭で海外の料理やダンス、衣服などを紹介することや、授業で世界のニュースを取り上げ、話し合いや交流に積極的に参加することだと思います。

また個人としても差別に対する意識を高め、自分の言動が他人を傷つけていないかを常に考えることが重要です。日常生活の中で差別的な言動を目にした際には、声を上げる勇気を持ちましょう。私も冒頭に述べた、「ハーフだから英語を話せるよね」ということを言われたら、自分のことをきちんと話して、理解してもらえるように説明する勇気を持ちたいです。沈黙は差別を助長する要因となり得るため、積極的に対話を促し、偏見を取り除く努力をみんなが続けることが大切です。

さらに、政府や企業も差別を根絶するための具体的な施策を講じる必要があります。差別に対する法律を強化し、違反者に対する罰則を厳しくすることで、差別の抑制につながります。また、企業においては、多様性を尊重した採用や職場環境を整えることで、差別のない社会を実現する一助となるでしょう。

人種差別は簡単には解決できない大きな人権問題です。しかし、私たち一人ひとりが意識を変えることで、少しずつ改善していくことができるはずです。私は、フィリピンと日本のハーフとして、両方の文化を大切にし、尊重しながら、差別のない社会を目指して行動していきたいと思います。みんながそれぞれの違いを認め合い、尊重し合うことのできる世界を目指して、これからも努力していきます。今こそ、過去の過ちを繰り返さないためにも、人権を尊重し、多様性を受け入れる社会を築く努力を始めるべきです。